

## ■大会企画シンポジウム「南相馬をともに歩む」

### 南相馬のあのときから今、そしてこれから

番場 さち子

(番場ゼミナール)

上原 孝太

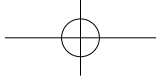
(玉川大学農学部)

(番場) まず自己紹介をします。私は南相馬市で学習塾を経営していました。2011年3月11日当時、約100名の生徒がこの塾に在籍していました。被災後の3月12日から14日にかけての3日間で、全員が避難して、生徒は0名となりました。私も避難生活を経験した後、4月に無料の学習会を開催し、ボランティア団体「ベテランママの会」を立ちあげました。この活動は、東京大学医科学研究所の上昌広先生（先端医療社会コミュニケーションシステム社会連携研究部門特任教授）の協力を得ながら、今も継続しています。（塾の経営について相談した）3人の弁護士の方からは、南相馬で子ども向けの事業を営むことはもう無理だと言われました。南相馬で仕事をするならば高齢者向けの事業をするか、学習塾をしたいのならば別の地域に移るかどちらかだとも助言されました。しかし、上原君が戻ったので、5月に学習塾を南相馬で再開しました。

(上原) 私は現在、玉川大学農学部生命科学科に在籍する大学1年生です。昨年の東日本大震災による津波で家財が全て流され、私の家族は仮設住宅で暮らしています。私自身は上京して現在1人暮らしをしています。家族は祖母、父、母の3名ですが、祖母と両親とで住む仮設住宅が離れています。昨年、祖父が亡くなってから、祖母は仮設住宅の外に一步も出ない生活になってしまっています。

(番場) 2011年3月11日以前は、学習塾で多くのイベントを開催していました。東日本大震災の1週間前の私の誕生日には、卒業生たちが集まって会を開いてくれました。3月12日は塾生の卒業を祝う会を開く予定でした。地震が起こる2時間前は、南相馬市の中学校では卒業式を行っていて、私も参列していました。震災当日、塾の周辺はそれほど大きな破損状況ではなかったのですが、大家の奥さんに促されて、実家を見に行き、そのときに道をたまたま右に曲がったことで私は生き残りました。左に曲がっていたら津波に巻き込まれて、今日ここに居ることもなかったでしょう。3月11日の夜は南相馬市立総合病院へ避難しました。私たちの地域は海沿いにあり津波が怖かったことと、病院であればテレビを見られるので、そこに逃げ込みました。福島第一原子力発電所（原発）からは23kmの距離にある病院です。病院では、避難者の私たちの目の前にブルーシートが敷かれて、泥まみれになった重篤な人たちが運ばれてきました。そこで塾に通っていた生徒の母親と再会し、子どもが3人も津波で亡くなったと聞かされました。

翌3月12日には南相馬市立原町第三小学校に、15日には相馬女子高跡に移動しましたが、自衛隊の方から「もっと（原発から）遠くに逃げた方がいい」と言われ、伊達市の体育館へ移りました。その頃はとりあえず、原発から



30km 範囲の外に1～2日の間出ていけばいいのだらうと思っていましたが、伊達市では南相馬市からの避難者は一列に並ばされ、スクリーニングを受けさせられました。しばらくして福島市の飯坂温泉に移動しました。

原発から30kmで線引きの円が引かれていますが、住民たちはとにかく恐ろしいので逃げることにしか考えず、結果として放射線量の低い地域から高い地域へ移動してしまったケースがありました。私たちが避難した伊達市もその当時、0.7～1.0mSV/時といった放射線量がありました。教室のパソコンが壊れて業者に電話すると、「原発から30km以内には入れない」ので人を派遣することなどできないと言われ、それではせめて故障したパソコンを引き取ってほしいと要望しても「放射能を浴びたものを他のものと一緒にできない!」と断られました。これが風評被害というものだと実感しました。

(上原) 3月11日当時、私は福島県立原町高等学校にいて、授業中でした。地震が起こったときは先生もうろたえていました。最初に言われたのは窓から離れる、自分の机から離れるな、そして揺れが小さくなったら校庭に出よう指示されました。最初の揺れからおよそ30分後に、教頭先生から、沿岸部に津波が到達したことを知らされました。情報が錯綜していて、津波の高さは3mとも20mとも言われていました。そのときは友人と「家に帰ったらテレビや筆筒が倒れているかもしれないね」と話していました。

地震発生から約1時間後、徒歩や自転車で帰れる人は帰宅するようにと学校から指示されました。当時通っていた高校は山側にあり、市街地も帰路途中で見たところでは、あまり被害を受けていませんでした。しかし、自分の家に近づくにつれ、道路上に車がエンジンをかけたままの状態であるのが何台も出てきて、トラックに乗った父と再会しました。そして父から家が流されたと言われました。祖父は白内障の手術を受けるため不在で、祖母の状況が分かりません。また、母との連絡もつきません。メールも携帯電話もつながりませんでした。電

話は11回目でようやくつながりましたが、すぐに通話が切れてしまいました。それから私は父の会社へ避難しました。母は中学校の避難所に行き、そこで祖母を探して合流することができました。祖父は白内障の手術を受ける前に地震が来て、そのまま急いで家に戻り、祖母を連れて津波を避けながら逃げてきたのでした。

3月11日は原発から3km圏内にしか避難指示は出ていませんでした。避難先でテレビを見て、原発に異常事態が発生していることを知りました。3月12日から父は、仕事の内容がライフラインに関わるものであったこともあり、その仕事を再開しました。私は自分たちの家はどうなったのか見に行こうとしましたが、その辺りはまだ潮がひいておらず、行くことができませんでした。3月13日はやっと潮がひいてきたものの、まだ萱浜地区には水が残っていて、自分の家までは到達できませんでした。

3月16日になると、原発の事故が収束する見通しがたたないことで、母方の実家の隣はもう避難すると言いました。そうした周囲の動きを見つつ、私は家族と離れ、一人で岩手県の親戚の家に行くことになりました。

(番場) 避難所で出された食事は当初、コッペパンとペットボトルの水1本だけでした。やがて支援物資が無造作に届き、アンパンが渡されました。最初のうちはとても嬉しかったのですが、なにしろ一度に大量に届くので、何回もアンパンを食べることになります。3日目にもなるとだんだん食べられなくなりました。私はこんな状態で生きていて、どんな意味があるのか? と思い始めました。その頃、避難所にいる子どもたちが、私に勉強を教えてほしいと言ってくるようになりました。普段は勉強するように言ってもしないものですが、こういう状況になると勉強したくなるのが人間の性(さが)のようです。私は子どもたちに勉強を教える中で、南相馬の子どもたちがどうしているのか、気になるようになりました。その折に親戚の遺体が出てきて、手続きなどする必要が生じたことを機会に、南相馬市に戻りました。引き止める両親を説得し1人で戻って、私の寿命が



縮まってもいい、そういう思いで塾を再開しました。すると連日40名以上の子どもたちが塾にやってきました。彼らは居場所を求めている感じでした。同年代の人と交わって痛みを共有したいのだと感じました。

私のこうした行動を批判的にたたく人もいました。あるとき、携帯電話への着信で、「教育者ともあろう者が、子どもに避難を促さずにいるとは何事だ」と言われたこともありました。その頃に、塾生だった上原君が南相馬市へ戻ってきました。私は彼に対し、仙台の高校へ転籍するよう助言していたので、彼を見た私の第一声は「なんで帰ってきたの!？」でした。それに対し上原くんは「原町高校で卒業したい。番場先生に大学生にしてもらいたい」と答えました。このことは後に、新聞でもとりあげられました。

**(上原)** 南相馬市に戻ってきた私は、住むところを探す必要がありました。10月までは両親と共に1K10畳の部屋を借りて住み、それ以降は仮設住宅に入居しました。同じ仮設住宅に、原発事故による警戒区域からの避難者が入居してきたりして、被災者であっても住民の間で意見のくい違いでトラブルが生じることもありました。

**(番場)** 親は被災した地域に残って働き、子どもだけ避難させるという家庭もありました。子どもはそういう環境にも慣れたふりをします。そこでエネルギーを使い果たして、勉強まで回らなくなるのです。すべての子とは限りません

が、避難生活の長さや学習の遅れは比例します。命がけの選択をした親御さんの選択を責められません。そうした子どもたちへの支援としては、学習の遅れを取り戻すための援助と同時に、丁寧に傾聴することが求められます。終わったことはいいじゃないか、と言う人もいますが、私たちは聴いてからでなければ「これからどうしようか」という先には進めない。あのとき何処にいた? どうしていた? どうやってここに来たの? そうしたみんなの体験を聴くことが出発点です。

**(上原)** 東京にいて、福島県出身と自己紹介すると周りほどよめます。「県」として、「放射能」のイメージでとらえられているのです。実家があった場所(土地)は、国であったか県であったか今この場で分かりませんが、とにかく政府に売却しました。一家としてこれからどうするかはまだ悩んでいるところです。

**(番場)** 被災地の地元住民は「どうしたい? 何がほしい?」と問われると、「忘れられたくない」と答えます。東日本大震災には地震・津波・原発事故の三重苦がありますが、この中では原発事故に伴う風評被害が一番の問題だと思っています。南相馬市の人たちに対して「声を発していない」と批判する方もいますが、東京とはすごく物理的にも距離がある地域だということ、そこにいる私たちの状況を思い起こしてほしい。私たちにどうか知恵を貸していただきたいと思っています。